

## 四四年手稿断片「疎外された労働」

におけるマルクスの哲学思想（下の中）

梯 明 秀

——一、要素的形態としての第一規定——二、主体的原理としての第二規定——三、人間の生命的自己  
関係——四、*Garung*のヘーゲル的概念——五、生命一般の場所即過程的な論理——六、人間種属の本  
来的な生命活動——七、第三規定の論理構造——八、第四規定の背景的論理——九、支配服従関係の論  
理的成立根拠——（以上、前号までに連載）——十、現実化された「主人と奴隸」の関係——十一、私  
有財産制度の概念的把握——（以上本号）——十二、疎外概念の上向的現実化の運動——十三、手稿全  
体の経済学的意味——（次号完結）——

### 十 現実化された「主人と奴隸」の関係

1

ヘーゲルは『精神現象学』B篇第四章A節「主人と奴隸」に関する個所において、まづ(α)、奴隸が主人との関  
係において何であるか、ということを明かにし、ついで、(β)、「畏怖」、(γ)、「形成」において、奴隸が自己自身  
において何であるかを吟味している。しかしながら、本稿としては、前者だけを辿ってみることによって、マル

クスの「疎外された労働」の概念に、それが連結しうることを論証とすることにとどめておくことにしたい。

ヘーゲルにおいて主人とは「自分だけでの存在を本質とする自立的意思」のことであり、奴隷というのは「生命または他者にたいするところの存在を本質とする非自立的意思」のことである。二つの自己意識の闘争において、われわれは次のことを見てきた。すなわち、まず「全く自分だけで有るのではなくして、他の意識にたいして有る意識、いいかえれば、存在する意識、または物性 Dingheit という形における意識が、純なる自己意識とともに定立せられている」ということである。そして「これらの両契機が、ともに本質的ではあるにしても、不同にして相互に対立し、いまだ統一のなかに復帰していない」ということであつた。したがつて、この自己意識と単なる意識との「両者は、相互に対立せる意識の二つの形態として存在する」〔二七〇頁、s. 145—6〕ということとを、われわれは見てきた。ここに、自己意識の形態、すなわち、自分だけの存在を本質とする自立的意思の形態にある個人が、主人であり、この主人にたいする外的存在を、したがつて自分の生命だけを本質とする非自立的意思、すなわち単なる意識の形態にある個人が、奴隷である。ところで主人は、(a)、「自己意識の概念(すなわち絶対否定的な単純な自我)としては、自分だけの存在の無媒介の関係にある」が、闘争の過程においては、もはや単純な自我に直接的であるだけでなく、(b)、「他の意識によって自己と媒介されたところの、自分だけで存在する意識であり、媒介の関係にある」〔二七一頁、s. 146〕。ところで、自己意識の自立性のために媒介となる他の意識、すなわち奴隷の意識とは、単なる生命的意識として、今一つの「自立的な物性一般との結合を本質とせる意識」にすぎないゆえに、主人の自己意識は、これらの両契機、すなわち、欲望の対象たる物そのものと、物性をもって本質とせる奴隷の意識とに、関係することになる。このばあい、「両契機の中の何れか一方に

他方を媒介として間接に関係する」ほかないが、単純なる自我、すなわち絶対否定的な無媒介態としては、「両契機に直接的に関係している」（二七二頁、S. 106）こと、言うまでもない。しかし闘争の現実的な過程においては、間接的に関係するほかないわけであって、そして、これは二つの推論形式をとる。

第一に、主人は自立的な物性一般を媒介として、間接に奴隷に関係する。奴隷は、単なる意識の形態にあるものとして、戦闘において意識の自然的肯定すなわち生命の直接性であり、この生命を賭する覚悟における自己意識の自立性を遂いに獲得しえず、したがって、ひたすら「物性という形態における自立性」においてのみあってこれに束縛されているところの、要するに、疎外された自己意識としての単なる意識の形態にある人間である。

しかるに、この疎外された自己意識の定有形態としての直接的生命ないし自立的物性こそは、自己意識的であろうと死を覚悟した主人にとって、否定さるべきものにすぎないのであるから、主人とは、この物性を支配する威力である」。そして「この物性は奴隷を支配する威力であるから、主人は、この推論式 Schluss によって、奴隷を自己の下に隷属せしめる」ことができる。——ヘーゲルのこの推論式は、階級的な支配関係のきわめて観念的な把握でないであろうか。しかし同時に、これと逆に、資本制的階級関係そのものの思弁哲学への反映であるとも、言いうるものでないであろうか。なぜなら、生活手段を資本として所有するところの、すなわち「自立的な物性を支配する威力」である資本家は、生活手段のために自己の労働力を販売するほかなきところの、いいかえれば、単なる生命的意識にすぎず、したがって外的事物に束縛されているところの賃労働者を、事実、経済的に隷属せしめているのであり、そして、この経済的な支配服従の関係をば、ヘーゲルは、労働市場の法律的に平等な格人関係の奥に、むしろ鋭く洞察しているものと見ることができるところである。

この第一の推論式にたいし、第二の推論式による、すなわち「主人は奴隷を媒介として間接に物に關係する」ところの、支配的形態は、賃労働者にとって直接的生産過程そのものにおける階級關係が、單に思弁的に把握されたかぎりの、しかし同じく、その深い認識でなければならぬ。すなわちヘーゲルは言う。——「奴隷といえども、広義の自己意識として、物にたいして否定的にも關係し、物を廃棄する。しかし、これと同時に物は奴隷にとって自立的であるから、奴隷は、その否定の働きによって物を絶滅するというまでに、物との交渉を断つことはできない。いいかえれば、奴隷は、物に労力を加える *berarbeiten* のみである」〔二七一頁、s. 146〕。これにたいして、單なる自己意識にとどまって、外的實在をただ觀念的にのみ絶対に否定するだけの單純な自我にある主人にとっては、自立的なる物との現実的な交渉もありえず、まして、自立的な物そのままの、有用性のない自然物の消費などは凡そ不可能のことではなければならない。自己意識の生命的表現であった欲望という形態において、その悪しき無限追求が可能であったのは、有用性のある生産物にたいしてのみであつて、自然物のままの自立性のまえには、主人の純なる自我は、これを表象として所有し觀念の対象とするほかに術もなかつたはずである。かくて、奴隷の労働による生産物において、主人は、自己の觀念的な所有と觀念的な鑑賞とを、現実的な欲望に結びつけることができる。すなわち、奴隷の労働を媒介することによって、始めて主人は、「物の純なる否定としての直接的關係」の現実化された「享樂 (*Genuss* を得る)」ことが出来る〔二七二頁、s. 146〕のである。これはまさに、生産過程において、資本家としては、自らの購買した労働力を消費するものとどまるところの、しかし賃労働者にあつては、自分の本質的な生命活動であるところの労働過程を、資本家が支配していることによつて、自らの生存を維持している、という資本制社会の現実の事態に照合する。すなわちヘーゲルの言葉

のとおり「（生産過程において）物の自立性のゆえに達成しえなかった（資本家の）欲望の満足は、物との交渉を断った（流通過程の）享樂において達成する」〔ibid〕ことができるのである。要するに「物と自己との間に奴隸を挿入した主人は、これによって物の非自立性のみに連絡して物をひたすら享樂し、これにたいして物の自立性の側面は物に労力を加える奴隸に委託している」〔二七二頁、S. 146-7〕のである。——このヘーゲルの命題は、階級社会一般につうずる支配状態の思弁哲学への単なる反映にすぎないが、ここに秘むところのヘーゲルの深い洞察は、このこと自体が、労働を委託された人間の疎外された状態そのものと、同一の事柄であるということとの、次のごとき認識による。すなわち、次の文章においては、主人のかかる支配状態は、奴隸の隸属関係によって確かに承認は得ている、しかし、この承認は厳密な論理的意味のそれにならなっていない、ということが、論述されているのである。

——「奴隸の意識は、一方では、物に労力を加える点において、他方では、限定された定有に依存する点において、非本質的なものとして定立されている。これら二つのばあい何れにおいても、奴隸の意識は、（外的）存在を制御して絶対的な否定を達成しえないのである。したがって、ここには、奴隸の意識が自分だけの存在であることを廃棄し、これによって、この意識は主人の意識が自分にたいして行為するところのものを、自分で行為するという承認の契機は、現存する。同じように、奴隸の意識のこの行為が、主人の意識自身の行為であるという承認の他の契機も、また現存する。なぜなら、奴隸の行為するところのものは、実は主人の行為であるからである。……しかしながら厳密な意味での承認であるためには、主人が奴隸にたいして行為するところのものを、自分自身にたいしても、また行為し、そして、奴隸が自分にたいして行為するところのものを、

主人にたいしてもまた行為するという契機が欠けている。これがために、一方的な異なる承認が生じているのである」〔二七三—四頁、S. 147〕。——

二つの自己意識の対立関係における承認の論理は、ヘーゲルによれば、単なる相互承認であるだけで不十分であつて、この相互承認が双務的でなければならぬのである。だが一方的な支配の状態は、相互に承認されたものであつても片務的である。支配する主人は、外的対象を無と見るところの絶対的な否定する威力であり、この向自有的自己意識をどこまでも自己の本質とするのたいして、奴隷の意識は非本質的な行為にとどまつてゐる。そして、これにたいして、同時に、奴隷が向自有的に自己の自由を意識し、主人を対象の奴隷とし、そして逆に主人が、この奴隷により支配を承認してこれに服従するというがごとき関係は、到底そこに見ることは不可能である。にもかかわらず、ヘーゲルは、このことを論理的に可能と主張するのであるが、この可能性が現実化するための必然性の契機を何処に見るべきであらうか。この点についても、ヘーゲルは解明するのであるが、

——片務的な承認関係のもとでは、「非本質的な奴隷の意識は、主人にたいしては、自分自身だという（主人の主観的）確信の真理性を具象化した対象そのものでなければならぬ。がしかしながら、ここで、この対象が確信に真理性を保証するものでないこと、すなわち、主人（の自己意識）が完成された直下に主人の得るところのもの、実は、自立的なる意識とは全く異なるものであることは、明かである。主人は自立的なる意識というようなものを得ているのではなく、むしろ（奴隷の）非自立的なる意識を得ているのである。したがつて主人は、（事実において）自分だけの存在を真理として確信しているのではなく、主人の真理は、むしろ、非本質的な意識と、この意識の非本質的な行為とであるにすぎない」〔二七四頁、S. 147〕。——

この言葉は、明らかに、支配者の意識と行為との自己喪失および自己疎外の状態を指摘しているのではないか。そして、この状態が、労働する人間の意識と行為との自己喪失および自己疎外の関係の結果的表現であり、これらの直接的な関係そのものであることも、もはや説明を要しない。すなわち、マルクスの分析した「疎外された労働」が現実的社会関係において呈示すべき状態を、ヘーゲルは既に「片務的相互承認の論理」によって展開していたものとせねばならない。ヘーゲルは続けて言う。

——「したがって自立的意識の真理は、奴隷としての意識である。勿論この意識は、最初は自己の外にあって自己意識の真理でないように見える。が、しかしながら主人が、その本質は自分がそれであろうと欲するところのものとは逆のものであることを示したと同じように、奴隷（の自己意識）も亦、完成された暁には、その直接的なる姿とは反対のものとなるのであろう。すなわち奴隷は、自己のうちに引き戻された意識として、自己に帰り真の自立性と変ずるのであろう」（二七四頁、S. 147—87）。——

ところで、「疎外された労働」の「第四規定」の個所で、C命題、すなわち「人間の疎外は、一般に人間と自分自身との凡ての関係の疎外は、人間が他の人間にたいして立つ関係のなかで始めて現実化され表現される」という文章につづいて、マルクスが次のごとくノートしたとき、ヘーゲルのこの言葉を念頭に浮べ、あるいは、この言葉の思想を背景としてペンを握っていたことに、異議を挿むことは誰しもできないであろう。

——「D、それだから、疎外された労働という関係では、何の人間も、彼自身が労働者であるような基準と関係とにしたがって、他の人間を見るのである。」（p. 309）——

この命題には明かに、労働者の主体性がマルクスによって宣言されている。したがって、マルクス自身も労働

者の立場を自己の主体性として労働者の自己意識において、「疎外され外在化された労働の概念が、実際に何のように言い表され叙述されねばならぬかを見よう」(三一〇頁)としたのである。そして、以下のごとく問を發している。——「もしも、労働の生産物が私にたいして疎遠であり、疎遠な力として私に對立するならば、そのときに、この生産物は誰に属するであろうか？　もしも、私自身の行為が、私に属さず、一個の疎遠な強制的な行為であるならば、そのときには、この行為は誰に属するのであろうか？」(三二〇頁)——そして直ちに「私以外の別個の存在に」と答えている。そして、「労働と労働の生産物とがそれに属し、労働がそれえの奉仕があるところの、そして、労働の生産物がそれに享受してもらうためにあるところの、そうした疎遠な(別個の)存在とは、ただ人間自身でしかありえない」はずであり、さらに、このように「もしも、労働の生産物が労働者に属さず、疎遠な力が彼に對立しているとすれば、このことの可能なのは、ただ、生産物の属してゆく相手が労働者以外の他人であるときのみである」(三一〇—一一頁)とマルクスは答えている。そして、この労働せざる他人と労働する自分との「對象的な現実的な」關係として、外在化され疎外された労働の概念を、次のごとく叙述しているのである。

——「だから、もしも人間が、彼の労働の生産物、對象化された彼の労働にたいして、疎遠な、敵對的な、強力な、彼から獨立した對象として關係するとすれば、彼は、この生産物にたいして、誰れか他の人間——彼にとって疎遠な、敵對的な強力な、彼から獨立した他の人間——が、この對象の支配者である、というように關係するわけである。もしも彼が、彼自身の行為にたいして不自由なものとして關係するとすれば、彼は、この行為にたいして、誰れか他の人間に奉仕した、その支配と、その強制と、その桎梏のもとでの行為として關係

するわけである。」（三一—頁）——

## 2

このマルクスの叙述において、対立した二つの自己意識の間における、さきのヘーゲルの片務的な行為的相互承認の論理が明らかに撰取され言表されていることについては、われわれは既に指摘しておいたところであったが、この叙述における二人の人間間の行為的相互承認の関係は、さらに、いましがた吟味してきたヘーゲルの二つの推論式を前提していることも、また明らかであるとせねばならない。したがって、ここにおける支配、服従の何れの契機についても、一方の他方にたいするヘーゲルの推論式による関係を、われわれは容易に展開して見ることができはずである。すなわち、「疎外された労働」なる概念の主體的契機に、客體的契機が綜合されているかぎり、労働人間と非労働人間とは、単なる意識と自己意識との兩極的対立として、相互に自立的な自然物を媒介し、相互に現実的な支配服従の二重の、しかし同一の関係を結んでおり、そして相互にこの同一関係を意識的にも行為的にも承認しているかぎり、**「疎外された労働」**の概念も、ここに始めて現実的になり、したがって具体的になっているのである。すなわち、このように現実化された同一の客観的な疎外の関係が、そのまま支配服従の二重の関係であるわけである。しかしながら、ヘーゲルにおいても、支配の関係は、自己意識の自己喪失であり、自己疎外の状態でしかないことを、必然的に自覚せざるを得ない構造を秘めたものであった。したがって、服従を承認する労働人間の疎外された意識にこそ、**「真実の自己意識が約束されていたのであった。**この顛倒の論理的必然性は、論ずるまでもなく、マルクスに継承され、ヘーゲルのこの自己意識の観念的運動は、疎外された労働からの自己回復というように、実践的な活動に現実化されるにいたるのである。

このようにして、「疎外された労働」なる概念のマルクスによる分析過程においては、支配者としての生産物の占有者は、疎外された労働の対象化された生産物そのものの人格的表現にとどまるとして、当然ながら、ただ、疎外の主体的関係を現実化するための手段的役割りしか与えられていないのである。ここでは常に、労働する人間が主体である。かくて、この現実化のための媒介者にすぎないもの、すなわち、疎外された自己自身の外在化された状態の人格的表現者を、誰が如何にして決定するかということ、自己疎外にある自己の主体的実践から必然的に出てくることで、無関係な第三者の任意によって偶然に与えられるはずのものでない、とせねばならないのである。すなわち

——「宗教的自己疎外は、必然的に、僧侶にたいする俗人の関係に、また知的世界のみが問題にされているかぎり、神人媒介者（キリスト）にたいする信者の関係に、現実化する。だが実践的、現実的な世界では、ただ他人にたいする実践的、現実的な関係をとおしてのみ、自己疎外は現実的であることができる。疎外がそれによって生じてくる媒介者は、それ自身、実践的なものである。」（三二二頁）——

宗教的实践においてはキリストなり僧侶なりが、生産的实践においては、自己の労働生産物を占有する資本家が、自己疎外にある人間によって主体的に創造されるか、あるいは意味づけられるかするのであり、そして、このことの相互承認によって、現実的な支配者が決定され、ここに客観的な現実的關係が成りたつと、マルクスは主張しているのである。この主張を、マルクスは次のようにも繰り返かえし述べている。

——「したがって人間は、疎外された労働によって、単に、生産の対象および生産行為にたいする彼の關係を、疎遠な、しかも彼に敵対的な人間にたいする關係として、生みだすばかりではなく、この人間はまた、他

の人間が彼の生産ならびに彼の生産物にたいして立つ関係を、さらに、彼がこれら他の人間にたいして立つ関係をも、生み出すのである。彼は、彼自身の生産を、彼の非現実化として彼の刑罰として生みだし、また彼自身自身の生産物を、喪失として、彼に属さない生産物として生み出すように、彼は、生産しない人間の、生産と生産物とにたいする支配を生み出すのである。彼が彼自身の行為を自分から疎外するように、彼は他の人間にその人自身のものでない行為を領有させる。」（三二—三三頁）——

ヘーゲルにおいては常に、したがって、その最も尖鋭な叙述であった「二つの自己意識の闘争」ないし「主人と奴隸」と個所においても、自己意識から出発するかぎりでの当然の成りゆきとして、まず、自己意識的主人の支配的關係が、客觀的事実として前提的に与えられ、そこから、この自己意識の自己矛盾による演繹において自己疎外の關係が論述されるのであるが、——そして、この点こそは、後に論述するとおり、まさにマルクスが非難するヘーゲルの実証主義にはかならないのであるが、——マルクスにあつては、演繹の出発点は、外から与えられる客觀的事実としての現象的な疎外の状態でなくて、この客觀的事実の悟性的分析において発見される本質的概念における主体的な自己矛盾の事実である。すなわち客觀的所与としての自己肯定的なヘーゲルの自己意識からでなく、自己否定的主体に直接的な事実としての自己疎外から出発し、そしてヘーゲルの自己意識をば、この自己疎外なる主体的關係の結果と見る。したがって、客觀的所与事実としての支配關係を主体的な服従關係の所産と見ることが出来る。かくては、支配服従の關係は、もはやヘーゲルにおけるがごとき相互承認の單なる自己意識の論理ではなく、疎外された労働の自己活動の論理として、意識の背後にある實在の現時的運動の論理である。ヘーゲルの自己意識における相互承認關係も、単に意識的なものにとどまらず、行為的でもあつたにして

も、事実が事実を限定するという客観的實在の論理には到底なりえないものであった。にもかかわらずマルクスにおいて、なおヘーゲルの自己意識の論理の継承を見るのは、現実の運動の論理を、マルクスは決して単に客観的な過程とのみ見ず、そこにおける主体的活動によってのみ客観的實在が動くと考えていたからにすぎない。すなわち現実の歴史的運動の主体的契機こそは、マルクスをしてヘーゲルを継承せしめたのである。これを逆に、マルクスにおける主体性をヘーゲル研究の残滓と見ることは、客観主義的な偏見にすぎない。弁証法的唯物論が客観的實在の単なる反映でないことは、「疎外された労働」なるこの手稿断片が、まさに雄弁に物語っている。そして、われわれは今ここに、この断片のこの「第四規定」においては、ヘーゲルの行為的相互承認の論理の唯物論化された姿を、見たのであった。

——「こうして、疎外された外在化され労働によって、労働者は、労働に無縁な、労働の外部に立つ人間の、労働にたいする関係を作りだす。労働にたいする労働者の関係は、労働にたいする資本家の、また普通に雇主と名づけられている人間の関係を作りだす。それだから私有財産は、疎外された労働の、また自然および自身にたいする労働者の外的関係の、産物であり成果であって、その必然的帰結なのである」(三二二頁)。——ここに労働に無縁な、労働の外部に立つ他の人間とは、階級社会が始まって以来の支配者のことであって、服従者としての労働人間——奴隷、農奴、賃労働者——の疎外された労働を占有して、これを自己の財産とする。これが私有財産制度であるが、いまここに労働者と呼ばれるものが、生産過程に入ったかぎりの商品人間、すなわち、賃労働者であるとすれば、かの疎外された労働および生産物の直接的占有者は資本家でなければならず、この占有という疎外された状態は資本家的私有財産である。ここに私有財産の内容となる占有されたものとは疎

外された生産物のみならず、疎外された労働者自身の外在化された労働も、また含まれていなければならぬ。マルクスも、私有財産を「外在化された労働の、物質的な要約された表現」（三一六頁）と規定している。すなわち賃銀の形態をとる労働力が、まさに、それである。

——「したがって、われわれは、労働と私有財産が同一であるということ洞察する。なぜなら、賃金は、労働の生産物、労働の対象、賃銀制のもとでの労働そのもの、と同じように、単に疎外された労働の必然的な帰結にすぎないからである。およそ賃金のもとでは、労働もまた、自己目的としてではなく、賃銀の下僕として現れるのである。……賃金は、疎外された労働の直接的結果であり、そして、疎外された労働は、私有財産の直接の原因である。それだから、そのうちの一方の側とともに他方の側もまた同時に倒れなければならないのである」（三三三—三四頁）。——

要するに、私有財産制度とは、労働者の生命的自己実現としての労働の生活における自己疎外において、服従的な関係を行為的に承認する労働者の、労働者としての非現実化そのものが、そのまま、支配的關係を行為的に承認する非労働者の現実化ということと、直接的に同一である、という事実そのものことであり、この事実における片務的な相互承認の關係の實在的な表現にすぎない。

## 十一 私有財産制度の概念的把握

1

さてマルクスは「第四規定」の以上のような具体化の最後に、すなわち、「或る人間の他の人からの疎外」と

いう疎外の現実的關係における、この他の人間が、一般に労働に疎遠な支配者であり、或る人間が賃労働者であるかぎりでは、資本家であることが、賃労働者の実践的生活そのものによって決定されることを指摘し、さらに私有財産一般の概念を導きだした後に、結論的に次のごとく述べている。

——「私有財産は、したがって、疎外された労働の、また自然および自分自身にたいする労働者の外的關係の産物であり成果であつて、その必然的帰結である。ゆえに、私有財産は、外在化された労働、すなわち外在化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間という概念の分析をつうじて明かになるべきものである。」——

そして、「第一手稿」の断片「疎外された労働」の今までの全分析と全叙述とを回顧して、また述べている。

——「確かに、われわれは、外在化された労働ないし生活という概念を私有財産の運動の成果として、国民経済学から受けとつた。しかし、この概念を分析して見ると、私有財産は外在化された労働の根拠、原因として現れてはいるが、むしろ、それは、この外在化された労働の一つの帰結にはかならないことが明かになる。それは、あたかも神々が、本来的には人間の悟性の昏迷の原因でなくて、その結果にはかならないのと同じである。後になって、この關係は交互作用へ転倒するのである」(三二一—三二四)。

現実的な關係としては、なるほど、私有財産を所有しないものが労働するほかないかぎりでは、私有財産こそが、疎外された労働の原因であり、前提である。にもかかわらず疎外された労働の概念のマルクスによる分析は、その逆であることを明示したのである。したがって、論理的根拠としての原因が、現実的前提としての原因の結果であるかのごとく、見えるところの、この転倒された現実的關係は、じつは後から成立したものと考えね

ばならないのである。すなわち、根拠づけるものと根拠づけられるものとの真実の論理的関係は、「後になって交互作用へ転倒する」とマルクスもいうとおり、交互的な因果関係としての仮象的現実転倒して現れる。この転倒の秘密を知ることができなかつたかぎりにおいて、国民経済学は、実証主義的誤謬を避けることができなかったのである。すなわち「国民経済学は、生産の本来の中核としての労働から出発するが、それにもかかわらず、それは労働にたいしてではなく、私有財産にたいして一切を捧げる」にいたつたのであり、そして「国民経済学は単に疎外された労働の法則を語つたにすぎない」のである。これにたいして、現象と本質との、現実と論理との転倒の秘密を知つていたかぎりで、すなわち、現実自体の自己矛盾の論理を把握していたかぎりで、マルクスは、「労働と私有財産との同一性」を洞察することを、成就しえたとせねばならない。そして、この同一性における区別の関係を次のように述べている。

——「われわれのところでは、外在化された労働が、一個同一の関係でありながら、相互に異つて制約しあう表現にすぎないところの、二つの構成部分に分解した。獲得は、疎外として、外在化として、そして外在化は獲得として、疎外は真の同化として、現われる。」——

——「外在化された労働の物質的な要約された表現としての私有財産は、一、労働にたいする、その労働の生産物にたいする、および非労働者にたいする、労働者の関係、ならびに、二、労働者にたいする、彼の労働の生産物にたいする、非労働者の関係、という二重の関係をふくんでいる」（三一六頁）。——

すなわちマルクスは、「第一手稿」の「疎外された労働」なる断片において、一個同一の關係の一方の側面のみを考察しているのである。すなわち、「この關係を労働者の側からだけ考察してきたが、われわれは後に、そ

れを非労働者の側からも考察するだろう」(三二二頁)と約束はしたものの、マルクスのこの「手稿」断片は、これを展開せんとするところで打ち切られている。したがって、この手稿断片は、「労働者自身との関連における外在化された労働を、すなわち外在化された労働の自分自身にたいする関係を、考察した」(三二六頁)にとどまったのである。にもかかわらず、マルクスは、「この関係の産物として、その必然的結果として、労働者および労働にたいする非労働者の所有関係を発見した」(三一六頁)のであった。

ところで、右に引用された後の方の句における、(一)の側面は服従関係であり、(二)の側面は、支配関係であるが、この支配と服従との両関係が、実は一個同一の事実関係であり、その同一性における区別が外に現出した対立の諸関係である。しかも、二つに分解した両側面が相互に顛倒した表現において相互に制約しあうということの理由については、前述来のヘーゲルの行為的相互承認の論理によって、われわれのすでに説明してきたところである。が、ここでは、「資本家の獲得は賃労働者の外在化として、そして逆に、賃労働者の疎外は資本家の真の同化として現れる」というふうな階級関係として、このヘーゲルの片務的な相互承認の論理を、克明に把握しておくことが必要であろう。マルクス自身の次の言葉も、このヘーゲルの論理の唯物論的表現である。

——「労働によって自然を我ものとする労働者との関連のなかでは、獲得は疎外として現れ、自己の行為が他人のための行為として、また他人の行為として現れ、生命の躍動が生命の犠牲化として、対象の生産が、疎遠な人間の許への対象の喪失として現れる」(三一六頁)。——

これらの転倒した表現において相互に制約しあう両側面をもつ一個同一の事実関係、すなわち私有財産制度をかく具体的に両契機の統一として把握していたかぎりにおいては、この手稿断片の叙述が、ただ労働者の側から

のみにとどまっているにしても、それは決して認識の不十分をいみすべきでないであろう。しかしながらマルクスは、なお、資本家の側からの考察をも試みていたことは、この断片末尾の次の文章で証明されている。

——「第一に言わなければならないのは、労働者において外在化、疎外の行為として現れる一切のことが、非労働者においては、外在化ないし疎外の状態として現れるということである。

第二に、生産における、また生産物にたいする、労働者の（心情的状态としての）現実的、実践的態度は、彼に対立している非労働者にあつては、理論的態度として現われるということである。

第三に、非労働者は、労働者が自分自身にたいして行ふ凡てのことを、労働者にたいして行ふ。しかし、彼は、彼が労働者にたいして行ふことを自分自身にたいして行わない。

われわれは、この三つの関係を、もっと詳しく考察しよう。——

これで、この手稿断片は終っている。しかしマルクスは、この約束を果さなかつたのであろうか。この約束は四四年の『手稿』の他の諸断片において果されている。このことは、右の引用文を論理的に吟味することからでも、ただちに理解しうることができる。そこにおいてマルクスが「第三に」としたところの全文を、読んで読者は、さきに片務的な相互承認の論理について引用したヘーゲルの言葉を想起するのであろう。それは、主人が奴隷を支配する関係における片務的な行為的相互承認にたいするヘーゲル自身の批判の言葉であり、ヘーゲルの自己意識の弁証法的運動における、その自己転化の必然性を論証する個所のものであった。すなわち次の言葉である。

——「しかしながら、厳密な意味での承認であるためには、主人が奴隷にたいして行ふところのものを、

自分自身にたいしてもまた行為し、そして奴隷が自分にたいして行為するところのものを、主人にたいしても行為するという契機が欠けている。」——

ここに述べられた双務的な相互間の承認行為の契機の展開として、ヘーゲルは、奴隷の側に真の自己意識が成立することに必然性を叙述してゆくののであるが、マルクスがヘーゲルの右の言葉をそのまま適用して、資本家階級による支配関係における片務的な相互承認行為を、批判的に指摘しているかぎりのものとしては、マルクスもヘーゲルとともに、賃労働者に真の自己意識を期待していた、というよりは、期待していたがゆえにヘーゲルの双務的承認の論理を継承した、と考えることは不自然でない。したがって、私有財産制度なる一個同一の事実を資本家の側から考察するということも、すでにヘーゲルにおいて主人の側から表察されたときの片務的承認関係を、マルクスが、資本制的階級関係に適用して、叙述を展開するであろうことは十分に推察しうる。

ところで私有財産とは、疎外された賃労働者の労働ないし生活のことであるから、賃労働者の自己意識とは、私有財産に埋没した自分の意識の否定的な自己関係のことであり、これは亦、疎外された自己の定有としての賃銀（生活手段）ないし不変資本（生産手段）から自己の人間性を奪還することをいみする。このような向自有的に自己関係する必然性にあつて、いまだこの必然性を現実に定立していない生活が、単なる外在化、すなわち疎外の関係である。したがって、この疎外の関係は、向自有的に媒介された自己関係であり、無媒介な自己関係として静止的な定有の実在そのものである。すなわち賃銀であり生産手段であり、要するに定有する資本にすぎない。そして、この定有の実在が疎外された労働である。かくて、労働を外在化する活動は、労働の疎外として、なお自己関係であるが、疎外された労働として对象的に静止されたかぎり、もはや自己関係の媒介性を無く

して直接的な自己関係となる。疎外の自己関係について、その直接的な無媒介態を、マルクスは、疎外の状態と呼んだのである。これが右の引用文の「第一」であるが、「第二」についても、ヘーゲルにおいて主人の自己意識が真実のそれではなく、疎外されたそれとして単なる意識にすぎなかったように、資本家の自己意識も、実践的でありえず単に対象把握の理論意識に疎外されるほかないこと、容易に理解しうるところであろう。これらのことについては、本稿において詳述するわけにいかないが、今ここで必要なことは、「第三」のこと、すなわち、私有財産制度を資本家の行為の側から見るといことが、何をいみするかということであった。

私有財産制度を、賃労働者の側から見るといことが、それは、自己の労働の疎外の状態を見るにしても、そこから自らの本来の姿に復帰せんとする向自有的関係の出発点として見ているのであるが、これに反して、資本家の側において見るばあいには、この賃労働者の自己疎外の関係を、ただ、この関係の無媒介な直接性としての疎外の状態においてのみ見るほかはない。疎外の状態にあつて無反省に安住するかかる資本家階級の意識が、私有財産制度の擁護になることはいうまでもないが、国民経済学ないし古典経済学が、あたかもこの立場にあつたのである。資本家的富の実体が疎外された労働そのものであるというこの事実の認識は、まさに古典経済学の最高の成果であつたわけであるが、しかし、スミスないしリカルドは、この疎外された労働を、単なる状態として、これを表から自己肯定的に直観し、この直観的表象を悟性的概念にまで分析して、これを科学的法則として定立したまでのことにすぎなかった。これにたいして、古典経済学の分析し抽出したこの疎外された労働なる事実を、単なる状態としてでなく、この定有的状態からの向自有的自己反省において、自己疎外の関係として把握したところに、マルクスの批判的立場があつたわけである。すなわち、スミスないしリカルドにあつては静止的な状態に

とどまった疎外の事實は、マルクスにおいては、自己否定的な運動として把握されているのである。内面的なこの自己運動の必然性にかかわらず、私有財産制度を、その外面的な静止の状態において見ることは、私有財産制度に自らの生存が保証されているからであるが、この自己肯定的な表からの直観こそは、近代ブルジョア社会における一切の社会科学に共通するところの実証主義そのものでなければならぬ。

ところで今しがた、ヘーゲルの『精神現象学』における自己意識の弁証法的運動が、客観的所与としての疎外の状態における自己意識から出発していたことを指摘してきたのであったが、そのかぎりでは、ヘーゲル哲学も古典経済学と同じく資本制社会にたいしては実証主義的立場にあつたと言うほかないが、しかし、二つの自己意識の行為的相互承認の論理的運動が、その片務的關係から双務的關係への具体化における必然性が、賃労働者の主体的自覚としての向自有的關係を指示している点から見ても、明らかにヘーゲルの自己意識における観念的弁証法は、私有財産制度を批判すべき契機を秘ませていたとせねばならない。そして、この批判的契機こそは、マルクスがヘーゲルから継承して、そして、これをこそ、古典経済学の実証主義を止揚するための原理としたところのものとせねばならない。この継承關係において、ヘーゲルの自己意識の弁証法における否定的契機が、その観念論的形態を如何に唯物論的に止揚したか、言いかえれば、ヘーゲルの向自有的愚弁的カテゴリーをマルクスが如何に分析的に批判しているか、このことの成就を約束する原理を示しているものは、「疎外された労働」と殆んど同時に執筆された他の「手稿」断片、「ヘーゲルの弁証法ならびに哲学一般の批判」であつた。ヘーゲルの実証主義をマルクスが鋭く批判するのも、四四年の『手稿』「第三」の最後に置かれたこの断片においてであるから、本節のテーマから逸れるようであるが、しかし、かえって、原理的に深化せしめるものとして、しばらく

く、この「哲学的手稿」に閲説しておきたい。

## 2

この哲学的断片は、「手稿第一」の「疎外された労働」なる断片とともに、四四年の諸手稿のうち最も纏った労作であるというだけでなく、ヘーゲル弁証法を経済の領域に止揚するための、したがって、古典経済学の諸範疇をマルクス自身の経済学のそれに転化せしめるための枢軸的契機たらしめるための、若きマルクスの最も鋭いヘーゲル哲学批判である点で、古典経済学の諸範疇を批判した他の諸断片にたいして、その批判的方法論的原理を供給しているはずのものと見るべきである。この「哲学的手稿」が批判の直接の対象として取りあげたものは、「ヘーゲル哲学の眞の誕生地であり、その秘密である」(三九八頁)ところの『精神現象学』だけであるが、この批判における成果は、まさに労働の論理としての否定の否定の弁証法を打ち立て得たことであつた。しかるに、この否定の否定の弁証法は、ヘーゲル『論理学』において、あたかも、その体系的な叙述が向自有の段階にまで自己展開されたときに初めて姿を現わすところの、否定的自己関係の論理そのものである。しかも、この否定的なもの自身との自己自身の否定的な関係としての否定の論理は、ヘーゲルの弁証法そのものとして、単に『論理学』の全展開を本質的に規定する論理であるだけでなく、ヘーゲル哲学の全体系を構成するところの原理的な方法でもある。したがって、この「哲学的手稿」断片は、ヘーゲル哲学一般的方法論的批判をいみするものであるが、特殊的には、向自有を向自有たらしめている否定的自己関係を批判的に問題にしている点で、賃労働者の論理的把握のために、ヘーゲルの向自有的論理構造を唯物論的に改造することを、意図したはずのものと見ることも不可能でない。「第二手稿」の「私有財産の關係」、「第三手稿」の「私有財産と労働」、とくに第一手稿の

「疎外された労働」などの諸断片が賃労働者の向自有的論理構造を直接に分析したものであり、残余の諸断片も、この論理構造の把握を前提として、それぞれのテーマについて執筆された諸手稿であることは、明かに洞察されるところであるが、この最後の「哲学的手稿」が、他の経済学的諸断片の各所に断片的に織りこまれていたものの集成であることを考え併せるとき、かくのごとく、マルクスの意図を推定することも、きわめて自然にして妥当なことであると思われる。とにかく、この「ヘーゲル哲学批判」を除いては、すべて国民経済学の批判に関する諸断片であるが、それらにおいてマルクスの試みたものは、国民経済学において与えられている実証的事実から出発して、そこに外在化されている本質が向自有的に運動する方向を分析的に解明することにより、出発点としての国民経済学的事実を仮象として批判することであった。このように、ヘーゲルの消極的な欠点の指摘だけにとどまらず、むしろ彼に隠された批判的精神を顕はに定立して、これを国民経済学批判のための武器としたところに、マルクス主義の二つの源泉は、マルクスによって統一されることになったのである。

さて、この「哲学的手稿」においても、マルクスはフオイエルバッハのヘーゲル批判を媒介にする。すなわち、マルクスはいう。——「ヘーゲルが、絶対に肯定的なものであると主張する否定の否定にたいして、フオイエルバッハは、自分自身のうえに立ち、積極的に自分自身に基礎をおいている肯定的なものを対置する。」「フオイエルバッハによれば、ヘーゲルは、実体の疎外態——論理的には、無限なもの、抽象的一般者、俗にいえば、宗教と神学——から出発する。そして次に、この無限なものを止揚し、現実的なもの、感覺的なもの、実在的なもの、有限的なもの、特殊なものを定立する。このかぎりまで、ヘーゲルは、宗教と神学とを止揚した哲学を定立するのであるが、さいごに、肯定的なものを再び止揚し、抽象態、無限なものを再び定立することによって、

宗教と神学とを定立する」（三九七頁）。「したがってフォイエルバッハは、ヘーゲルの否定の否定を、単に哲学の自己矛盾としてしか、神学ないし超超越者などを否定したあとでそれを肯定する哲学、つまりフォイエルバッハ自身と対立して絶対に肯定的な哲学としてしか、扱えていない。そして彼は、ただ、肯定的なもの、感性的に確實なものから出発しているだけである。」——このようにマルクスは、フォイエルバッハの一面性を指摘するのであるが、この一面性におちいった理由として次のごとく説明する。——「ヘーゲルの否定の否定のうちに存している肯定、すなわち自己肯定と自己確認とは、フォイエルバッハにとっては、まだ自己自身について確実なものでない。それゆえ、自己自身について疑っている、それゆえ、証明を必要としているところの、つまり自己の定有によって自己自身を証明もしなければ保証もされないところの、肯定である。と解されている。であるから、ヘーゲルのこの自己肯定と自己確認とにたいして、フォイエルバッハとしては、直接じかに、感性的に確実な、自分自身のうえに、基礎をおいた肯定が対置されるのである。」——このように説明したのちマルクスは、——「しかしヘーゲルは、フォイエルバッハの批判にかかわらず、否定の否定を、そこにおける積極的な関係からして、真実に唯一のものを把え、そこにおける否定的関係からして、すべての存在の唯一の真実な行為を自己活動的行為として把えることによって、ヘーゲルは、歴史の運動にたいする抽象的な論理的な表現を見いだしている。このような歴史は、まだ前提された主体としての人間の現実的な歴史ではなく、神による人間の創造行為であり、かかる発生史にすぎないにしても」（三九八頁）。——と述べて、ヘーゲルの否定の否定という向自有的自己関係の運動の、その抽象的形態のうちに隠された積極的な意味を、すなわち「ヘーゲルにあっては未だ没批判的であったこの運動の批判的形態」を、マルクスは、かの「哲学的手稿」において説明しているので

ある。たとえば、次のごとく述べている。

——「ヘーゲルの人現象学とその究極の成果において、運動し生産する原理としての否定性の弁証法において、偉大なものは、じつにヘーゲルが、人間の自己産出を一つの過程として把握、対象化すること *Vergegenständlichung* を対立的に置くこと *Entgegenständlichung* とつづいてついでに外在化 *Entäusserung* とつづいて、さらにこの外在化の止揚として把握していることである。このようにして彼は、労働の本質を把握、対象的人間を、現実的であるがゆえに真なる人間を、彼自身の労働の成果として把握していることである」(四〇三頁)。

ここに「外在化の止揚」としての労働の本質を把握しているということは、マルクスも言葉をかえていっているとおり、「労働において、人間が外在化の枠内で、すなわち外在化された人間として、向自的に成ること *das Fursichwerden*」の認識である。このような労働についてのヘーゲルの本質的認識は、「過ぎ去った一切の哲学を、人間の思惟の外在化された学問とし、この外在化における個々の諸契機を、抽象的自己意識の契機として止揚し、かくして成立する自分の哲学を哲学そのものとした」ところのヘーゲル自身の哲学的行為から得られたものであった。したがって、そのゆえに、「ヘーゲルの認識し承認していた労働ということも、抽象的に精神的な労働にすぎなかった」。かくして、反対に、具体的に物質的労働を問題にするかぎりでは、それが精神的労働の外在化にすぎないものとなることにより、「労働を、ただ、人間が自己を保証する本質として把握する」だけであり、「その否定的な側面を見ずして、ただ、その肯定的側面のみを見る」という限界にあり、マルクスによって「ヘーゲルは近代国民経済学の立場にたっている」(四〇四頁)と規定されるほかないのであった。にもかかわ

らず、マルクスがヘーゲル批判において獲得せんと試みたものは、否定の否定の弁証法における肯定的な側面のうちに隠された否定的な側面の分析的抽出によるその解明であった。この点、つぎの言葉によっても端的に表明されている。——「現象学 $\nabla$ が人間の疎外を堅持しているかぎり、たとえ人間がそこで精神の姿態でのみ現象しているにすぎないにしても、現象学 $\nabla$ には、批判のあらゆる契機がかくされており、しかも既に、任々ヘーゲルの立場をはるかに凌駕する様式で準備完成されている」（四〇二頁）。——すなわち、ヘーゲルの疎外の弁証法においては、その定有的実在への外在化における自己の本質の確認という肯定的な側面は、その否定的側面として、外在化された本質の自己への復帰という自己反省的運動を必然化するのであるが、マルクスは、ヘーゲルにおけるこの否定的なものの自己関係としての向自的な運動を、弁証法における本質的契機と見て、これを労働の論理として継承し具体化したのである。

このことを言いかえれば、要するに、ヘーゲルが『論理学』という精神的労働において正しく把んでいた弁証法も、国民経済学の対象とする物質的労働に、マルクスが適用してみようと試みたとき、その外在化の運動の成果としての疎外された状態を、たとえヘーゲルとともに仮象と見るにはしても、この仮象的な定有からの自己反省というヘーゲル的な向自的運動が、もともと精神的労働にとどまっていたかぎりで、その精神的労働の自己確認になるほかないわけである。したがって疎外された労働の外在化された、状態としての私有財産制度の単に精神的な止揚にとどまるといふ観念論的限界を、かゝる適用においてマルクス自身の気ずかざるをえなかったところである。そのかぎり、疎外された労働の外在化の状態としての私有財産制度にたいして、この制度を批判的に止揚せんとするところの物質的労働そのものの自己反省という向自的運動は、ヘーゲルには無かつ

たに等しく、したがって国民経済学的な実証主義と結果において同一となるわけである。かくて、さきに論述してきた「主人と奴隸」の二つの自己意識の相互承認の弁証法的発展も、観念的な自己反省にとどまる向自有的カテゴリーにすぎなかったのであり、これがマルクスによって資本制的階級対立に適用されるばあいにおいては、疎外された労働を、その自己疎外の関係において見ずに、その外在化された定有的状態においてのみ見るところの、資本家の立場と異なる理由をもちえない。ヘーゲルの行為的承認の論理が、すなわち、その片務的關係から双務的關係への具体化における顛倒の必然性が、ヘーゲルを私有財産制度の擁護者たらしめていないようにも見えることは、ただ、ヘーゲル弁証法の精神主義的な自己反省の契機のうち、現実の資本制社会の階級的矛盾が、外から反映されただけのものにすぎないと考えるべきであろう。この単なる反映にすぎない表象を、この表象に対応する対象の科学的分析を媒介にすることによって、概念にまで加工されるときに、言いかえるならば、ヘーゲルのかかる実証主義に秘む観念的な批判の契機が、古典経済学の悟性的に抽象した「疎外された労働」という感性的事実に結びつくときには、はじめて、現実の資本制社会を批判しようところの、唯物論的な向自有的カテゴリーが成立するのである。このようなイデオロギー的関連を前提とした上でのみ、われわれは、ヘーゲルがマルクスにより実証主義として非難されながらも、古典経済学の実証主義を止揚すべき批判的契機を自らの哲学に秘ませていた、ということができらるであろう。

他方において、なるほど、疎外された労働が資本であるという事実の直観は、古典経済学の成果であった。古典経済学は、この事実を直観し、この直観的表象を悟性的概念にまで分析したが、これを理性的原理にたかめるという認識はできなかった。ところで、疎外された労働の状態を直観して、この状態に自己矛盾を感じ、そこか

らの否定的な自己関係の必然性を認識せんとする主体性において、悟性的概念は理性的に転化しうるのであり、直観的事実の概念的把握ということも可能なのである。そして、この認識を成就したのがマルクスである。すなわち、疎外された労働と資本との区別における同一性として私有財産制度を把握しておいて、そのうえで、この一個同一の関係の資本家的側面を否定的に裏から見る。これが、本節において最初から当面してきたところの、そもそもの、問題であった。これは、この一個同一の事実を表からのみ肯定的に直観した古典経済学を批判的に分析し、その「疎外された労働」の悟性的概念を理性的実体に変換して、この理性的概念の自己展開において、現実の私有財産制度を批判的に再構成することであって、これが「疎外された労働」という「手稿」全体の問題でもあったのである。

この「手稿」断片全体を貫くところの直観的事実を概念的に把握するという批判的思惟は、四四年『手稿』以前にマルクスは、ヘーゲルの『法の哲学』から学んでいたと見るべきであるが、これがマルクス自身の思惟を決定する方法として、彼によって継承され唯物論化されるためには、ヘーゲルにおける実証主義が批判されていないならばならない。このことは、今われわれの見てきた「哲学的手稿」から確かめられた事柄であった。そして次に、このようにして唯物論化されたこの方法論が、やがて「疎外された労働」なる手稿断片の全体を貫くにいたったと考えるべきであろう。ところで本稿は、全体として、この手稿断片を最初から順序をおって方法論的になどってきたものであり、しかも、ヘーゲルの『精神現象学』における客観的精神としての、相互承認の論理についての発展的叙述が、「主人と奴隷」における主人の支配状態の自己意識が必然的に転倒されるという論理の形態で、この手稿断片に結びついていることを、本節において、われわれは確めたわけであったが、この結合の根

底には、さきの哲学的手稿における『精神現象学』の弁証法にたいする鋭い批判としての「哲学的手稿」の努力が、前提され、かつ原理となつて横わつていっているということを、ここに注意しておきたいのである。

ところで、四四年の『手稿』全体についてであるが、その殆ど全部の諸断片は、国民経済学的諸概念の批判的研究のマルクスにおける最初のものであるからして、この年に既に、資本制的な私有財産制度を、労働の疎外された状態において見て、しかも、この自己疎外から恢復せんとする向自有的自己関係において、それを批判的に分析せんとするマルクスの意図と方法論とは、確立されていたとせねばならない。そしてマルクスのその後の全生涯は、この意図実現の完遂に捧げられ、『資本論』がその輝かしき努力の結晶であつたことに、読者は想いを馳せて見るべきであろう。したがつて、この理論経済学としての『資本論』の学的全体系においては、かの唯物論化されたかぎりの「概念的把握」の方法も、完成された姿で一貫されているはずだと考えねばならない。